

フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

2005年8月

高松市教育委員会
株式会社 象企画

例　　言

1. 本報告書は、株式会社象企画が施工するフィットネスクラブ建設に伴う発掘調査報告書で、高松市多肥上町に所在する日暮・松林遺跡（ひぐらしまつばやしいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調査地：高松市多肥上町 1323 番地 6 ほか
発掘調査：平成 16 年 12 月 1 日～平成 17 年 1 月 7 日
整理作業：平成 17 年 5 月 1 日～平成 17 年 8 月 31 日
3. 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社象企画が全額負担した。
4. 発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員小川賢が担当し、末光甲正（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。整理作業は小川と片桐節子が担当した。
5. 本報告書の執筆は、第 1 章第 1 節および第 2 章を文化振興課文化財専門員川畠聰が、第 1 章第 2 節、第 3 章第 1 節・2 節、第 3 節の遺構および第 4 章を小川が、第 3 章第 3 節の遺物を片桐節子が行い、編集は小川が行った。
6. 第 4 章で掲載した赤色顔料付着遺物の蛍光 X 線分析については、魚島純一氏（徳島県立博物館）に依頼した。
7. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を行うにあたって、香川県教育委員会から御教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。
8. 調査について、以下の業務を委託発注により実施した。

基準点測量：株式会社四航コンサルタント
遺物写真撮影：西大寺フォト
9. 採図として、高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 「太出」、「林」を一部改変して使用した。
10. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は世界測地系の座標北を示す。
11. 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SX：性格不明遺構
12. 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目　　次

第 1 章　調査の経緯と経過	
第 1 節　調査の経緯·····	2
第 2 節　調査と整理作業の経過·····	2
第 2 章　地理的・歴史的環境	
第 1 節　地理的環境·····	4
第 2 節　歴史的環境·····	4
第 3 章　調査の成果	
第 1 節　調査区の設定と調査の方法·····	6
第 2 節　調査地の概要と基本層序·····	6
第 3 節　遺構と遺物·····	12
第 4 章　まとめ·····	25

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

株式会社象企画（以下「事業者」と表記する）が計画するフィットネスクラブ建設工事に関し、予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。高松市教育委員会では工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である日暮・松林遺跡の隣接地であることから、当該地に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が考えられたので、事業者に対し、「周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接していることから、遺跡が存在する可能性が極めて高く、工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に多大な影響を及ぼす可能性もあるため、工事着手前に試掘確認調査を実施することが望ましい。」と説明を行い、任意協力をお願いした。事業者と協議の結果、事前に試掘調査を実施することで合意した。造成工事の内、駐車場部分については盛土を行うことから地下遺構に影響がないが、建物部分については掘削を伴い地下遺構に影響を及ぼす可能性が高いことから、平成16年10月18日に試掘調査を実施した。6本のトレンチ調査の結果、対象地北側1/3と南側1/3において弥生時代～古代にかけての遺構・遺物を確認することができた。高松市教育委員会は平成16年10月21日に香川県教育委員会に対し試掘確認調査結果を送付するとともに、平成16年10月28日に造成工事の施工者である事業者から提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法57条2第1項）を進呈した。平成16年11月1日付けで香川県教育委員会より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、発掘調査実施の旨の回答が高松市教育委員会にあり、事業者に伝達した。これを受け、高松市教育委員会は事業者と試掘調査結果をもとに協議を行った結果、建物建設予定地北側1/3と南側1/3の約800m²について工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、平成16年12月1日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、その費用負担および契約・支払事務については事業者が行うこととした。

第2節 調査と整理作業の経過

発掘調査・整理作業は、以下の工程で行なった。

【発掘作業工程】

12/ 1～10 重機による表土剥ぎ

12/ 2～16 北調査区：遺構検出・遺構掘削作業、遺構写真撮影、遺構断面図作成

12/17～28 南調査区：遺構検出・遺構掘削作業、遺物出土状況写真撮影・図面作成、遺構写真撮影
遺構断面図作成 12/27・28 北調査区遺構平面図・土層図作成

1 / 4～ 6 南調査区遺構平面図・土層図作成 1 / 4～ 7 撤収作業

第1表 整理作業工程表

	4月	5月	6月	7月	8月
接合・復元					
遺物実測・トレース					
遺構トレース					
図版レイアウト					
遺物写真撮影					
遺物収納					
原稿執筆・編集					
印刷・校正					



第1図 調査地及び周辺遺跡位置図（下段：縮尺 1/5,000）

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島、立石山塊、南西部に石清尾山、淨瀬寺山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20～300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島などの島をも市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は瀧れ川になることが多く、早くからため池を造築して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は、年間1,000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、今回の調査地である多肥地区周辺は、ため池に加えて出水（すい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、鈴木出水等が見られる。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第2節 歴史的環境

高松平野では、ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大してきた。特に、今回の調査地の多肥上町松林周辺においては、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、面的に遺跡の広がりや内容が判明している地域である。高松平野の歴史的環境は他の報告書に譲ることとし、ここでは周辺の調査について述べる。

旧石器・縄文時代の遺跡は、今回の調査地周辺では知られていない。松林遺跡や多肥松林遺跡の旧河道中からわずかに縄文時代晚期の遺物が出土している程度である。当該期の遺跡は高松平野全体でもほとんど知られておらず、不明な点が多い。

弥生時代前期になると、多肥松林遺跡で溝が検出されているほか、松林遺跡では集石遺構が見られる。弘福寺領田図調査F区では、前期末～中期初頭の溝が確認されている。さらに空港跡地遺跡A区では、前期末～中期初頭の土坑が多数発掘されており、集落が存在した可能性がある。中期中葉になると、香川県立桜井高等学校の中心部を南から北へ流れる自然河道が埋没を始めている。この流路から土器とともに、鳥形木製品、木製農具等が出土している。流路の両岸には掘立柱建物や堅穴住居が営まれており、特に流路東側の集落域は日暮・松林遺跡まで広がっている。この時期には多肥松林遺跡の北西部において洪水砂層、松林遺跡において地震の液化現象である噴礫が認められ、自然災害

があつたことを物語つてゐる。中期後半～後期前半には遺構・遺物ともほとんど見られない。後期後半には日暮・松林遺跡において竪穴住居が多数検出されている。

弥生時代後期中葉以降には、灌漑水路が多数掘削されている。また、日暮・松林遺跡や多肥宮尻遺跡においては古墳時代中期～後期前半の土器や木製品を包含する自然河道が検出されている。松林遺跡でも後期の溝が確認されている。空港跡地遺跡A区では、弥生時代後期～古墳時代前期の前方後方形および前方後円形の周溝墓が確認されており注目されている。つづく古墳時代中期以降では、空港跡地遺跡A区で中期の竪穴住居が確認されており、集落が存在している。

平安時代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了しており、多肥松林遺跡において掘立柱建物や溝が掘削されており、溝からは斎弔が多量に出土している。

中・近世においては条里地割の溝や掘立柱建物が検出されている。特に松林遺跡では香川郡の一条と二条の条界溝が検出されている。日暮・松林遺跡においては多量の瓦器椀が出土している。

周辺の調査履歴（～2005. 3. 31）

遺跡名（調査原団）	調査期間	面積	調査機関	文献
松林遺跡（通字路整備）	1995. 5. 19～1995. 11. 8	1,000 m ²	高松市教育委員会	1
松林遺跡（宅地造成）	2004. 4. 1～2004. 4. 12	800 m ²	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡（高等学校建設）	1993. 4. 26～1994. 9. 6	17,600 m ²	香川県埋文センター	3
多肥松林遺跡（土木事務所建設）	1994. 10. 1～1995. 3. 31	5,900 m ²	香川県埋文センター	4
多肥松林遺跡（都市計画道路建設）	1997. 4. 1～1997. 12. 31	7,000 m ²	香川県埋文センター	5
多肥松林遺跡（高松南署移転整備）	2003. 12. 1～2004. 3. 31	2,000 m ²	香川県埋文センター	6
日暮・松林遺跡（都市計画道路建設）	1993. 11. 15～1995. 9. 29	11,600 m ²	高松市教育委員会	7
日暮・松林遺跡（病院建設）	2002. 5. 12～2002. 7. 31	2,200 m ²	高松市教育委員会	8
日暮・松林遺跡（農道整備）	2004. 5. 12	70 m ²	高松市教育委員会	9
日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム建設）	2004. 6. 23～2004. 8. 27	1,600 m ²	高松市教育委員会	10
日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ建設）	2004. 12. 1～2005. 1. 7	750 m ²	高松市教育委員会	本書
多肥宮尻遺跡（都市計画道路建設）	1997. 4. 1～1999. 9. 30	12,245 m ²	香川県埋文センター	11～13
多肥宮尻遺跡（宅地造成）	2004. 7. 5～2004. 7. 16	205 m ²	高松市教育委員会	14
讃岐国弘福寺領田団調査F区	1997. 12. 8～1998. 3. 31	1,000 m ²	高松市教育委員会	15
空港跡地遺跡A区	1991. 4. 1～1993. 6. 30	12,200 m ²	香川県埋文センター	16

※「香川県埋文センター」は「財團法人香川県埋蔵文化財調査センター」の略

既存報告書（報告書が刊行されているものは、報告書のみを掲載した。）

松林遺跡

- 『香川県立高松桜井高校周辺道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』高松市教育委員会 1996
- 『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』高松市教育委員会 2004

多肥松林遺跡

- 『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1回 多肥松林遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1999
- 『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会 1995
- 『多肥松林遺跡：県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1998
- 『多肥松林遺跡』香川県埋蔵文化財センター－年報 平成15年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2005

日暮・松林遺跡

- 『都市計画道路堀尾町上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会 1997
- 『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会 2003
- 『高松市内選舉完結調査概報－平成16年度国民補助事業－』高松市教育委員会 2005
- 『特別養護老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会 2005

多肥宮尻遺跡

- 『多肥宮尻遺跡』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1998
- 『多肥宮尻遺跡』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1999
- 『多肥宮尻遺跡』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2000
- 『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会 2004

讃岐国弘福寺領田団調査

- 『讃岐国弘福寺寺領の調査II』高松市教育委員会 1999

空港跡地遺跡（A区）

- 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5回 空港跡地遺跡V』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2002

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定と調査の方法

調査地はフィットネスクラブ建設予定地内で、試掘結果より保護措置不要となった部分を挟み、南北に2分割する調査区となっている。北調査区は最大で南北に20m、東西に24.5mを測り、面積は約440m²、一方の南調査区は最大で南北14.5m、東西27mを測り、面積は約310m²で、南北調査区を合わせた総面積は約750m²となった。

調査の方法は、重機により遺構・遺物が確認できるまで掘り下げ、人力によって精査・検出にあたった。遺構番号は南北の調査区で共有し、検出した順にその平面の形態から想定した性格のものを受け、順次遺構の掘削を行った。

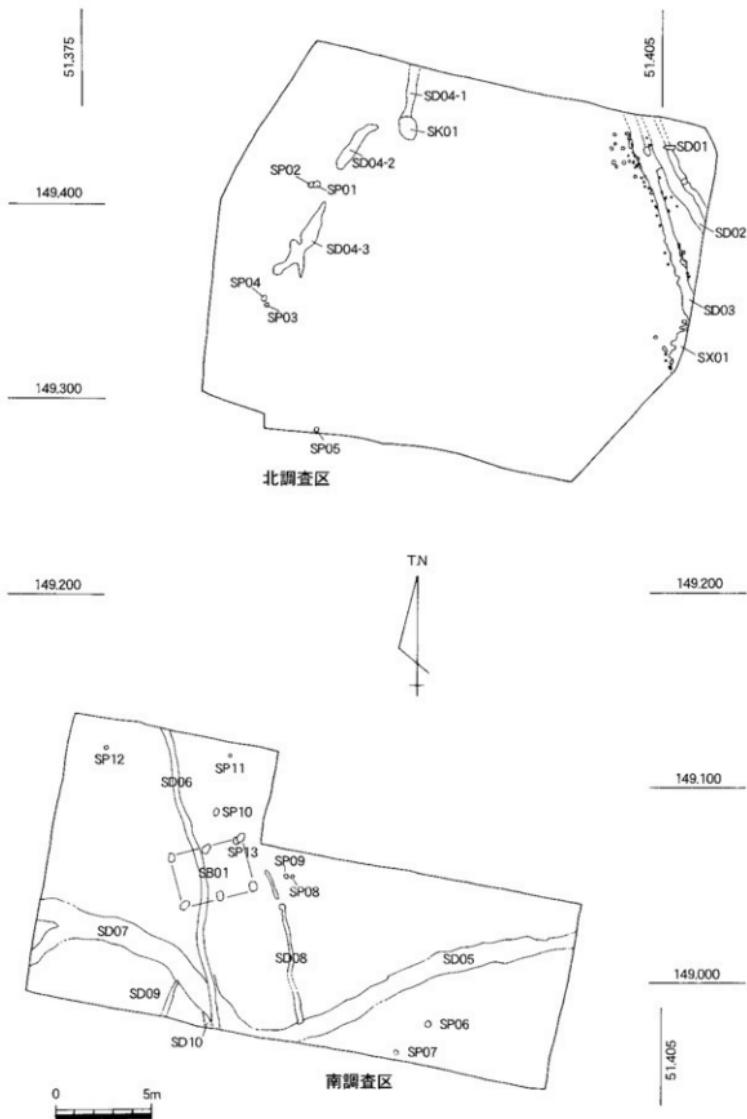
測量は、既に発掘調査が行なわれた日暮・松林遺跡（特養ホーム）で用いた3級基準点から、南北の調査区に各々3箇所に移設したものを基準とした（委託業務）。この基準点より2×2m程度のグリッドを設定し、遺構図面や遺物出土状況図、土層図等の作成を手書きによる1/20圖化を行った。

第2節 調査地の概要と基本層序

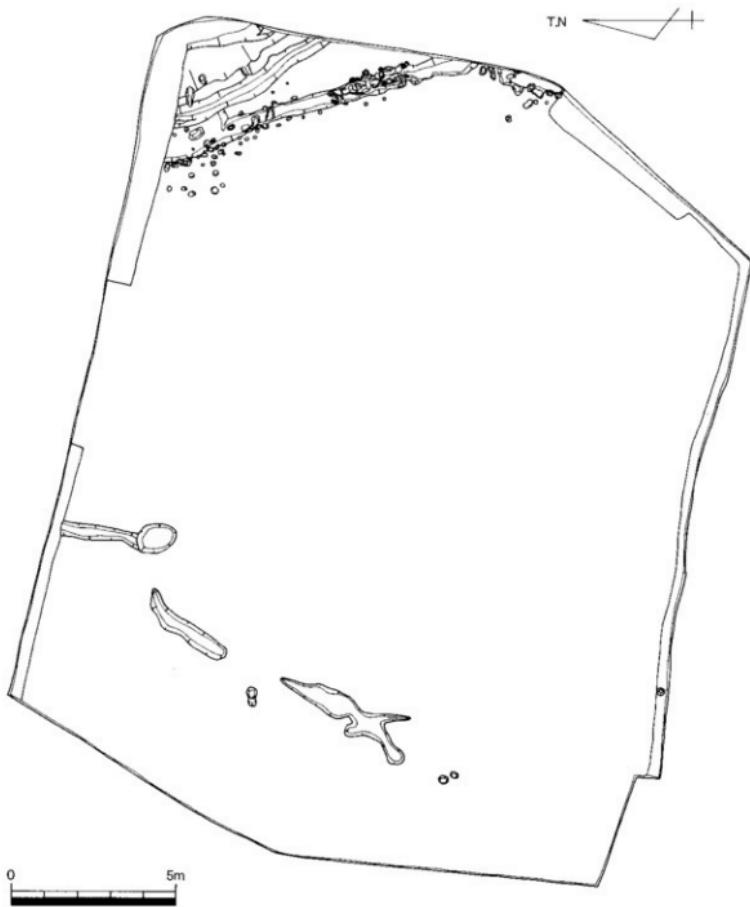
当該地の調査前の状況は水田であり、西半の一部には盛土を行い資材置場として利用されているものの、南西部に向かうにつれ標高が高くなり、北東に下る地形を認めることができる。一方、調査地より北の現況は水田面が東から西へと下っており、東側に微高地、西端部に埋没流路の存在が窺われる地割がみられ、調査地の北面において地形の変化を想定できる。

調査の結果、北調査区の東部は低地になっており、その北端部に大溝SD01他、SD02・03の3条の溝跡が確認されている。この他では、遺構面が黒褐色土となる湿地状の堆積層（第14層）に覆われ、北調査区においては遺構・遺物が希薄であった。一方の調査対象外の部分を挟んで、南調査区では掘立柱建物SB01や溝跡等の遺構が確認されているが、中でも弧を描き南西部に伸びるSD07は、弥生時代終末期を中心とした遺物が認められ、調査地の南西に位置する集落が当調査地に及ぶことが想定できるものとなった。

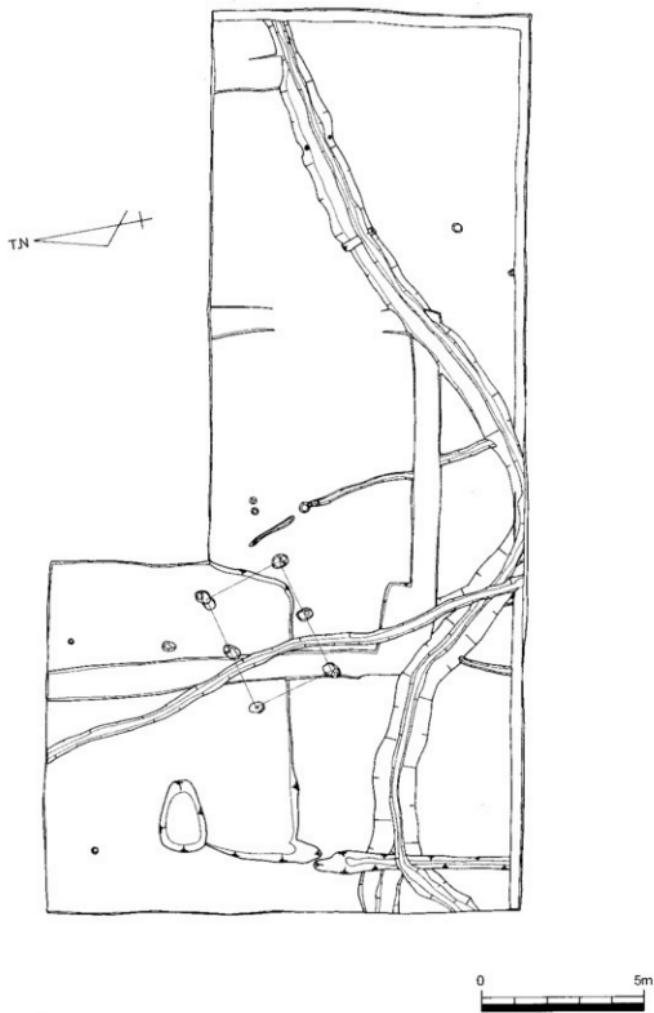
調査にあたり、層序については次のように判別した。表土としたものは、現状での盛土部分（花崗土層）と耕作土、その下位に存在する主に浅黄色を呈するシルト質極細砂層である。この浅黄色土層には国産の磁器製品が含まれ近世以降の堆積物と考えられることから、これまでを表土とし重機により除去した。また同じ埋土をもつ掘り込み（遺構）は搅乱坑として、調査の対象外とした。確認した層序の最下位には明黄褐色粘土層が認められ、この堆積層は周辺部の調査において遺跡全般期での地山層とされており、遺構・遺物の希薄であった北調査区及び南調査区の東端部においては、この粘土層上面まで暫時掘削し確認作業を行なった。この結果、北東に位置するSX01を除けば、確認した遺構はその上部に堆積する鈍い褐色砂礫混じりシルト層（北調査区：第15層、南調査区：第2層）の上面から認めることができ、濁った土を基盤としていることからも大半で本来の生活面がある程度遺存した状態であったと推定される。この他、低地帯となる北調査区においては湿地状の堆積層（北調査区：第14層）が認められるが、畦畔等水田に関連した遺構は確認できなかった。出土遺物も皆無であり詳細な所属時期は不明だが、これを覆う包含層（北調査区：第2・3層）との関係や周辺部に所在する遺跡の状況から、古代以前で弥生時代終末期を中心とした堆積層と推定される。



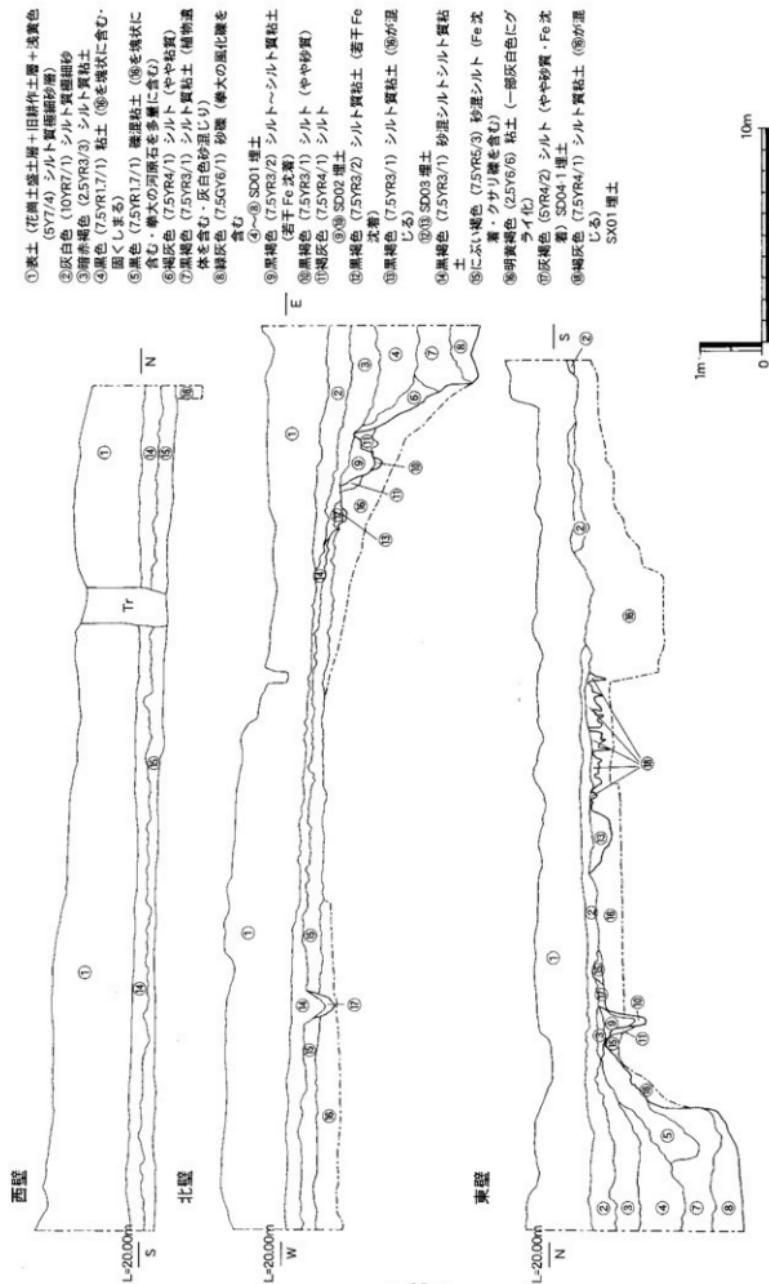
第2図 遺構配置図 (縮尺 1/250)



第3図 北調査区平面図（縮尺 1/50）

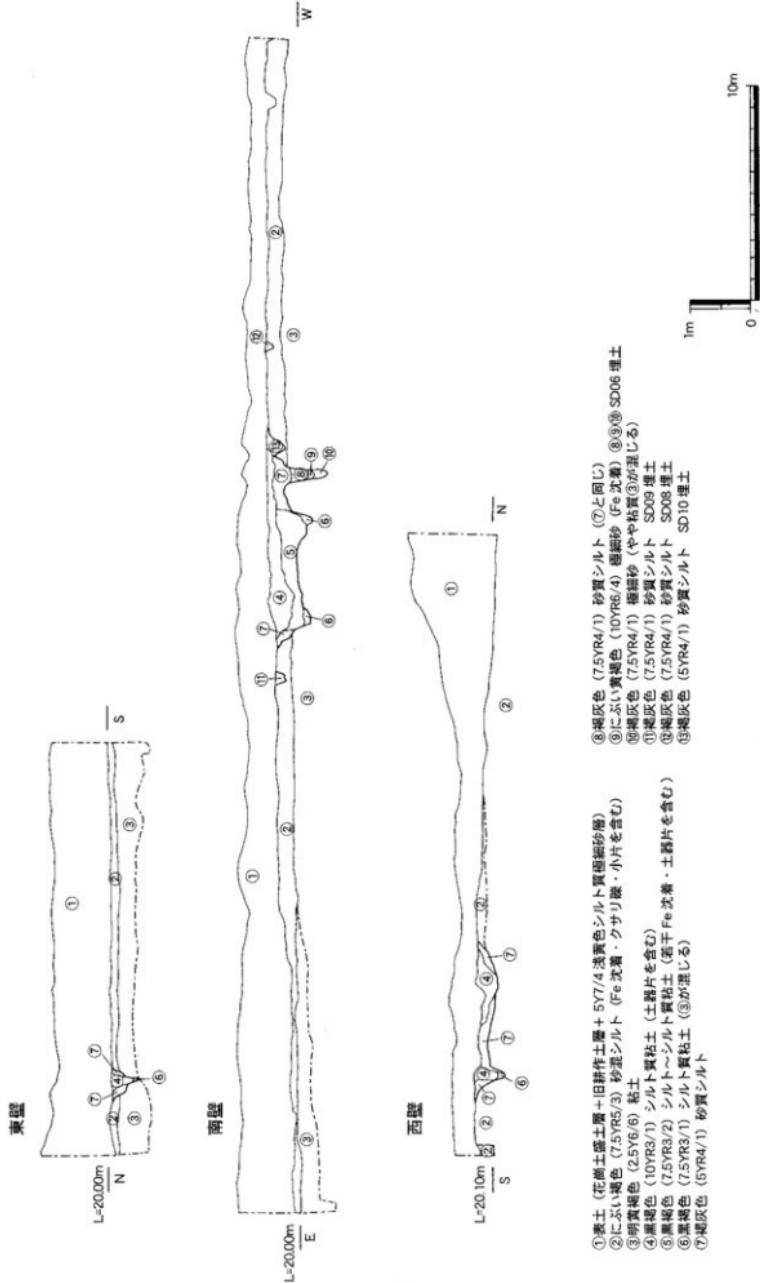


第4図 南調査区平面図（縮尺 1/150）



第5図 北調査区土層図

第6図 南調査区土層図



第3節 遺構と遺物

S B 0 1 (第7図)

南調査区西部において確認した掘立柱建物跡である。標高 20.09 ~ 20.17 m で検出したもので、1 × 3間（梁行1間：約 2.7 m 前後、桁行2間：3.9 m 前後）の規模をもち、主軸の方向は N - 73° - E を測る。柱穴の掘り方は長軸方向に 0.5 m、短軸方向に 0.4 m 程の卵円形で、その主軸方向には建物の主軸方向にほぼ直行するもの（P-1・4・5）と東に傾くもの（P-2・3・6）とを認めることができる。断面は柱痕部分がやや窪む台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土で地山層とみられる明黄褐色粘土が混じる。柱痕部は平面が径 0.2 m 程の円形に認められ、柱筋及び柱間は比較的揃うものとなっている。柱痕部の埋土は、いずれも上層に下部の上が混じる灰褐色土、下層に黑色粘土が認められた。出土遺物には、建物の東面を構成する P-3・4 の柱痕部上層より弥生土器とみられる細片があるが、詳細な時期を決定できるものではない。

S D 0 1 (第8図)

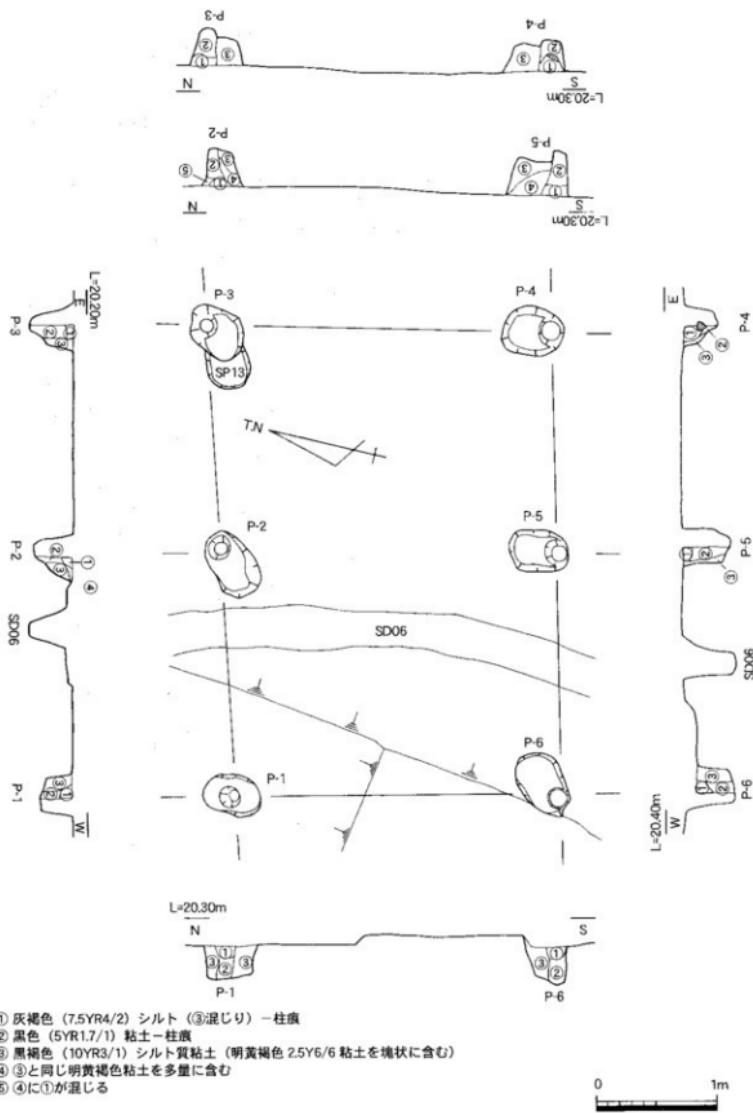
北調査区において確認した大溝である。調査地で最も低地となる北東隅で、標高 19.45 m 前後で検出した。検出長は約 4 m、検出幅は約 2 m であるが、東岸部は調査地外に広がり未確認である。深度約 1 m の規模で北西方向に緩やかに下り、西岸部には SD02 より伸びる取水状の縫みが 2箇所認められる。遺構断面は下部が急傾斜となる段が付くもので、埋土は次のように 3つに大別される。下層部は拳大の風化礫を含んだ緑灰色の砂礫層、中層部には植物遺体を含んだ褐灰色～黒褐色土の堆積が認められ、次第に水流が悪くなっていた状況が考えられる。上層部は固く締まった黒色粘土層に塊状の明黄褐色粘土や拳大の河原石が多量に認められることから、人為的に廃棄され機能が停止したことか窺われる。出土遺物には、下層部で叩き石、甕・高坏ほかの弥生土器細片、中層部では甕・高坏ほかの弥生土器細片、上層部には高坏ほかの弥生土器細片があり、これらの遺物によれば弥生時代終末期頃に廃絶したものと考えられる。また SD01 ~ 03 の埋土の上部（第5図第2・3層）には、須恵器を含む堆積層が被覆しており、これらが機能を停止した後も相当期間、低地帯での産みとして残っていたものと推定できる。

S D 0 1 出土遺物（第9図）

1は中層、4は上層、2・3・5~9は下層出土である。1は弥生時代終末の広口壺の口縁部である。外面にヨコナデが認められる。2・3は甕である。2は「く」の字状に外反した口縁部からやや口頭部で比厚し端部はそのまま面を持って終わり、外面にヨコナデが認められる。3は「く」の字状に外反した口縁部から端部は上方に拡張する。全体的に摩滅しているが、外面は体部にハケメが認められる。内面は横方向のヘラケズリである。外面色調は灰白色を呈しており、器形からも丸龜平野のものと考えられる。弥生時代後期中葉頃のもの。4・5・6は高坏部である。4は内面ヨコナデで角閃石を含む。弥生時代終末のものである。6は外面に凹線文を施している。弥生時代中期後半のものである。7・8は底部である。7は外面底面際に板状工具による押圧が、内面に斜方向のヘラケズリが認められる。8は外面縦ヘラミガキ、内面縦板ナデである。9は叩き石である。一方の先端部に敲打痕が認められる。

S D 0 2 (第8図)

北調査区において確認した溝である。標高 19.37 ~ 19.53 m で検出し、検出長は約 5.3 m、検出幅は 0.67 m 前後を測る。深度は 0.36 m 前後で、やや蛇行気味に北西（N - 20° - W 前後を測る）方向へ緩やかに下る。また西岸部には、SD03 より伸びる取水状の縫みが認められる。遺構断面は V 字形を呈し、埋土は黒褐色土で下層ではや砂質、上層において粘性を帶びて認められた。遺物は出土していないが、検出及び堆積状況から SD01 と同時期の所産と推定できる。



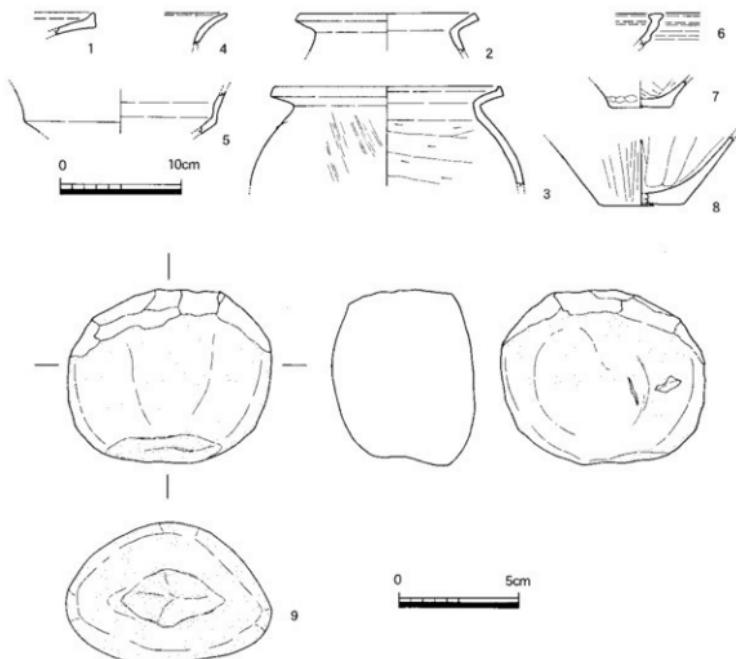
第7図 SB01平・断面図 (縮尺 1/40)



第8図 SD01・02・03平・断面図 (縮尺 1/50)

S D O 3 (第8図)

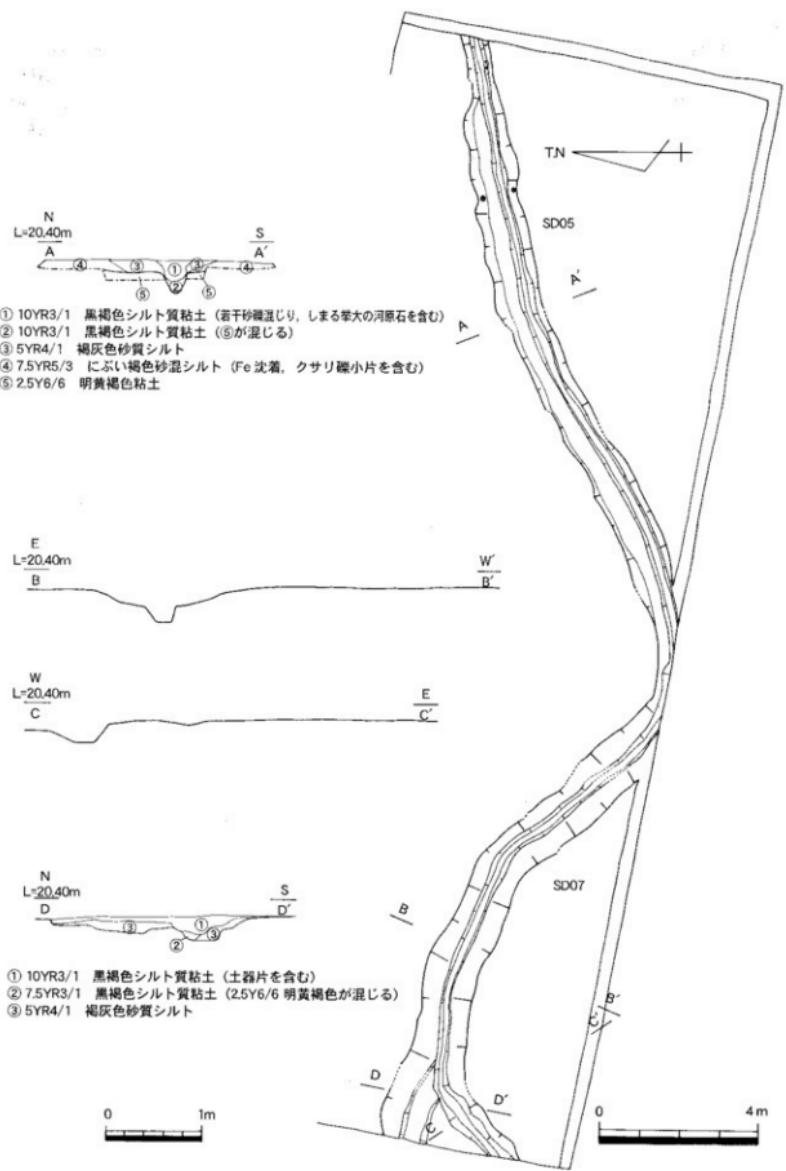
北調査区において確認した溝である。標高 19.50 ~ 19.61 mで検出し、検出長は約 10 m、検出幅は 0.6 m 前後を測る。深度は 0.12 m 前後で、直線的に伸び北西 (N - 20° - W 前後を測る) 方向へと緩やかに下る。また底面及び西岸部を中心にピットあるいは足跡状の窪みが無数に確認された。溝断面は船底形を呈し、埋土は黒褐色土で下層には明黄褐色粘土が混じる。遺物は出土していないが、検出および堆積状況から SD01・02 と同時期の所産と推定される。



第8図 SD03 溝の断面と出土遺物 (縮尺 土器 1/4, 石器 1/2)

S D O 5 (第10・13図)

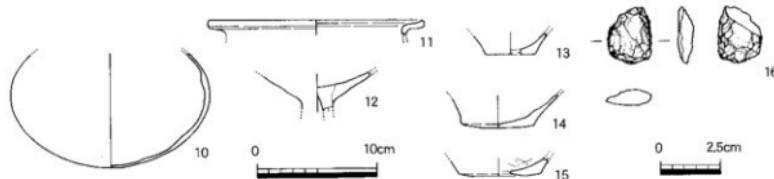
南調査区において確認した溝である。標高 19.84 ~ 20.18 m で検出し、検出長は約 15.7 m、検出幅は 1.2 m 前後を測る。深度は 0.28 m 前後で、直線的に伸び北東 (N - 70° - E 前後を測る) 方向へと緩やかに下る。なお平面の検出状況や南調査区の南壁に認められる堆積状況等によれば、後述する SD07 より繋がる溝と考えられるが、調査地の末端部で大きく方向を変えていることから別の構造とし調査を行なっている。溝断面の堆積状況では、外縁部が褐色砂質土で充填された船底形を呈し、中央で U 字形に窪む黒褐色粘質土層が認められる。断面形状からは再度に亘り掘削されている可能性も考えられるが、西部において上部に堆積する粘質土層が幅広くなり SD07 では溝の幅を覆うように検出されていることから、排水先である東部が先に埋まり水捌けの悪くなつた状態で西部が埋没したものと推定できる。遺物は若干量であるが、SD07 寄りとなる西半部に多く、粘質土層の最上部において拳～人頭大の河原石に混じり出土した。これらの出土遺物や SD07 と共に通する埋土から、弥生時代終末期に埋没したものと考えられる。



第10図 SD05・07平・断面図 (縮尺 平面図1/120, 断面図1/50)

SD05出土遺物（第11図）

10は弥生時代終末の細頸壺の体部である。胎土に角閃石を含み、外面底部に煤が付着する。11は口縁端部をやや上方に拡張した甕である。全体に摩滅するが、内面の一部にヨコナデが認められる。角閃石を含む。12は高环坏部である。脚部と坏部を接合したものである。13～15は底部である。13・14は角閃石、15は金雲母を含む。13は底面がややふくらみを持つもので、外面と底面にヘラミガキの痕跡が認められる。15は内面斜方向のヘラケズリである。16はサヌカイト製の石鏃である。一部を欠損する。



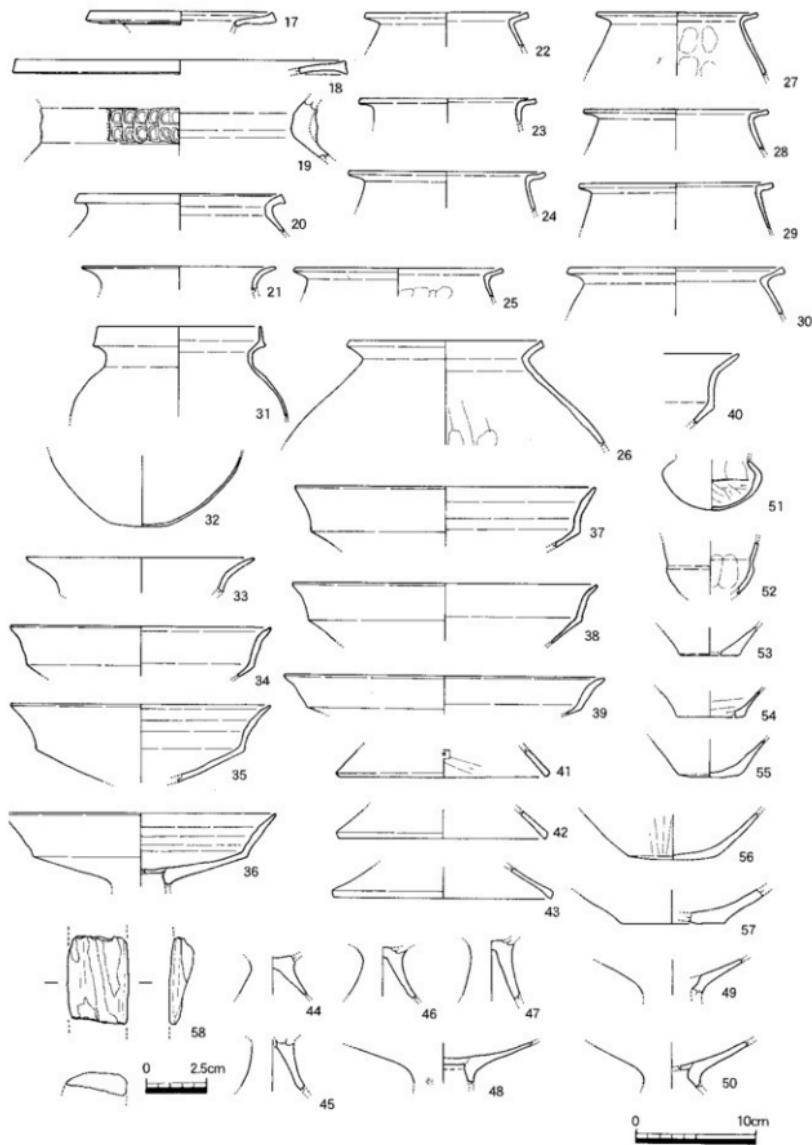
第11図 SD05出土遺物（縮尺 土器1/4, 石器1/2）

SD07（第10・14図）

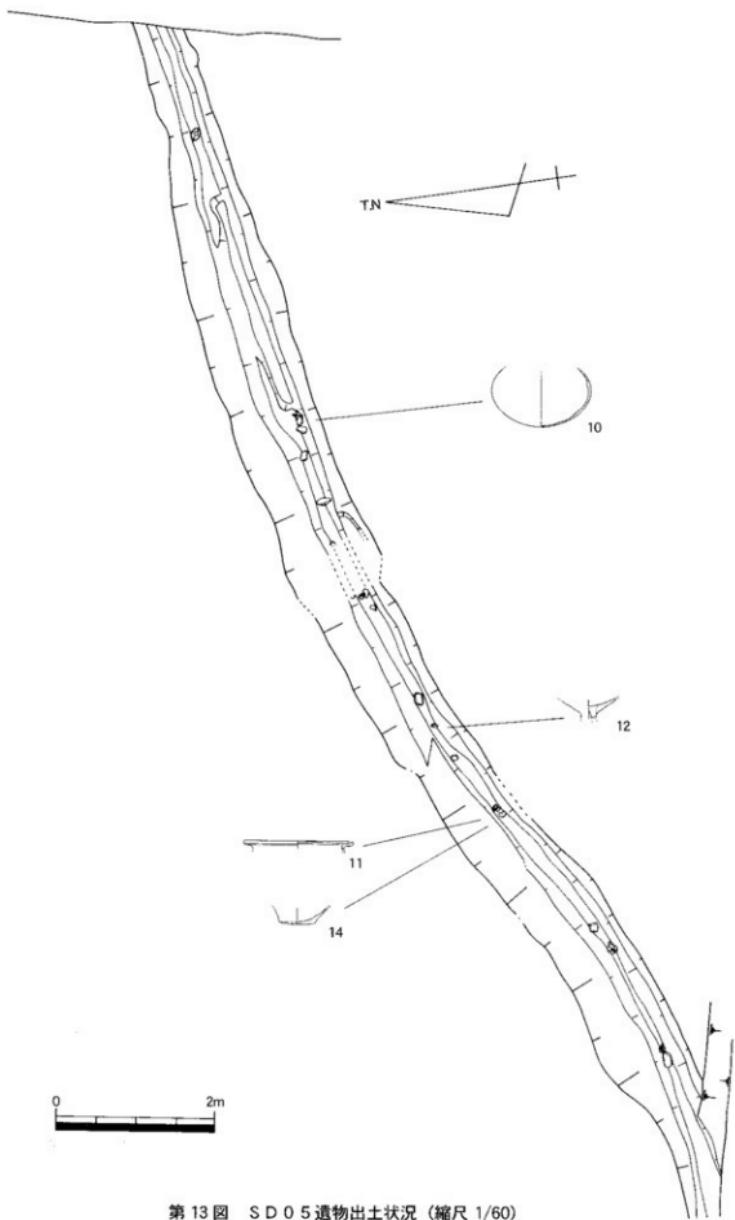
南調査区において確認した溝である。標高20.16～20.23mで検出し、検出長は約11.7m、検出幅は1.35m前後を測る。深度は0.32m前後で、弧を描くように湾曲しながら南東方向へと緩やかに下る。先述のように東端部でSD05に繋がる可能性が高く、また西端部においては分岐した箇所が認められ、深度がやや深く南西方向から湾曲してくるものと、やや浅く直線的な西方からの流路とが合流している。埋土の堆積状況では上層を覆う黒褐色粘質土層が中央でU字形に窪み、段部に褐色砂質土層が認められる。造構断面は壁面の中位部分に段が付くような形状を呈しており、微高地となる南側の壁面が急勾配となっている。造構が示す様相や遺物の出土状況から南部に住居等の施設跡が想定されたが、調査範囲内においては確認できなかった。遺物は遺存状態が悪いものの、黒褐色粘質土層の最上部において比較的まとまって出土している。出土遺物から、弥生時代終末期に埋没したものと考えられる。

SD07出土遺物（第12図）

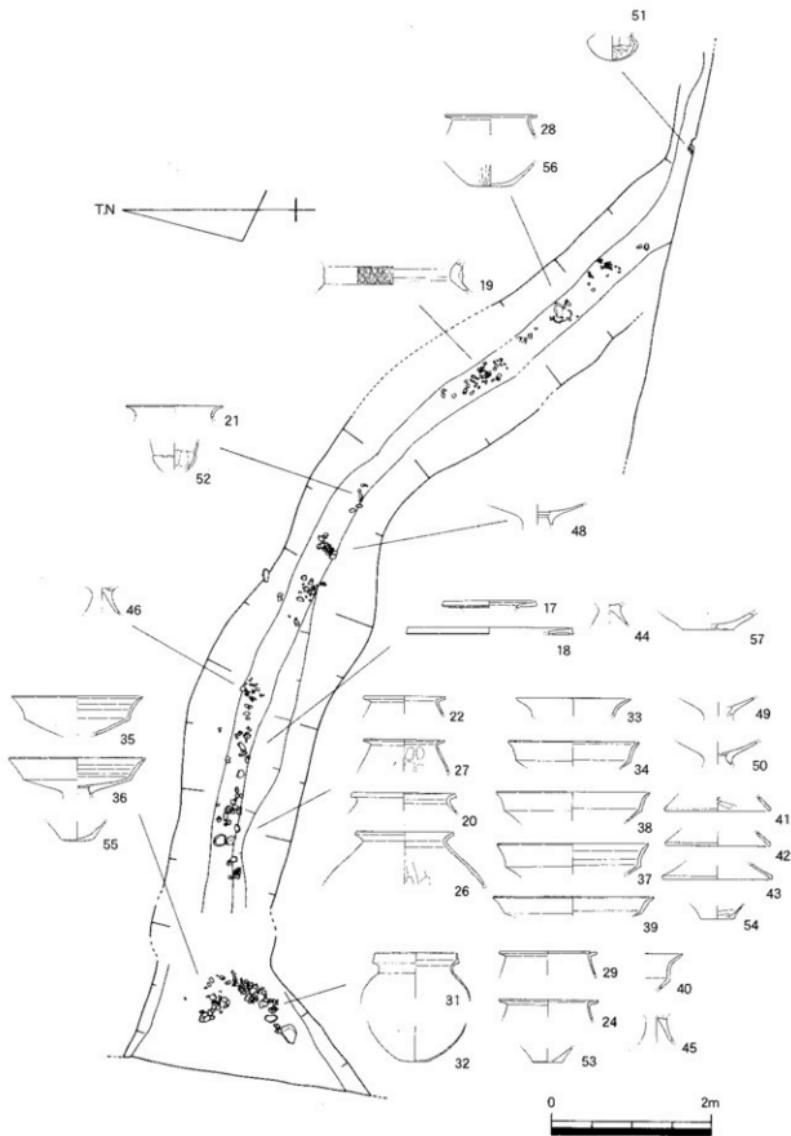
17～19は甕である。17は頸部から水平方向に伸びる口縁部を持った広口甕で、口縁部中位でやや比厚して端部はそのまま終わる。18も弥生時代終末頃の広口甕の口縁部である。19は弥生時代中期中葉から後半の甕で口縁部に押圧突帯を巡らす。20～31は弥生後期の甕である。21は体部から緩く外反する口縁部を持つものである。22～30は体部から「く」の字状に外反する口縁部を持つもので、いずれも端部を拡張しない。全般的に摩滅のため調整は不明なものが多いが、25と29の内面に指押さえが、26の内面に指押さえとヘラケズリもしくは板ナデが認められる。29の口縁部は短い。20・28は角閃石、22・26は赤色粒を含む。31は吉備系の甕である。32と同一個体と考えられ、器壁は非常に薄い。下田所式と考えられ、31には内外面にベンガラの付着が認められる。高松平野では木太中村遺跡で1点、一角遺跡で2点、中間西井坪遺跡で1点が出土しており、いずれも亀川上層式のものである。この出土状況は他の丸亀平野、三豊平野に比較して希薄であるといえる。33～40は弥生時代後期後半～終末の高環坏部、41～50は高环脚部である。35～37、39・40は角閃石を含む。44～47は胎土が精良で、脚部から坏部を連続して成形している。調整は摩滅が著しいものの47にヘラケズリが認められた。48～50は円盤充填法を持つものである。51・52は小型丸底土器である。51は弥生時代後期後半のもので、胎土に角閃石と赤色粒を含む。内面下半をヘラケズリ、上半を指押さえする。52は胎土に角閃石を含むもので、内面体部を指押さえする。53～55は甕の底部である。53は角閃石を含んだもので、摩滅のため調整は不明。54は内面にヘラケズリ。55は底部にややふくらみを持つ。56・57は甕の底部で、56は外面にヘラミガキの痕跡が認められる。58は柱状片刃石斧である。



第 12 図 SD 07 出土遺物 (縮尺 土器 1/4, 石器 1/2)



第13図 SD 05遺物出土状況(縮尺1/60)



第14図 SD 07 遺物出土状況 (縮尺 1/60)

SD06 (第15図)

南調査区において確認した溝である。標高 20.00 ~ 20.191 mで検出し、検出長は約 15.5 m、検出幅は 0.38 m前後を測る。深度は 0.5 m前後で、SB01付近でやや蛇行しながら北西 (N - 12° - W前後を測る) 方向へと緩やかに下る。遺構断面はU字形を呈するが、溝幅に比べ深く開削されている。埋土は上層部に褐色粘質土が堆積し、以下砂質土がラミナ状に認められる。遺物は弥生土器片 1点のみで詳細な時期は不明だが、SD07 に先行して埋没しており弥生時代終末期以前の所産と考えられる。

SD06 出土遺物 (第15図)

59は底部で、調整は摩滅のため不明である。

SD08 (第15図)

南調査区において確認した溝状遺構である。標高 20.13 ~ 20.17 mで検出し、検出長は約 8.1 m、検出幅は 0.33 m前後を測る。深度は 0.06 m前後と浅く、SB01付近で途切れる。流路の方向は不明であるが、SD06 と同様の北西 (N - 17° - W前後を測る) 方位と考えられる。遺構断面は船底形を呈し、埋土は褐色土の単層である。SD05 に交わるが、平面の検出状況では SD05より先に埋没している。出土遺物は皆無で詳細な時期は不明だが、SD06 と同様相を示すことから弥生時代終末期以前の所産と考えられる。

SD09 (第15図)

南調査区において確認した溝状遺構である。標高 20.23 m前後で検出し、検出長は約 1.68 m、検出幅は 0.27 m前後を測る。深度は 0.1 m前後と浅く、SD07付近で途切れる。流路の方向は不明であるが、北東 (N - 25° - W前後を測る) 方位と考えられる。遺構断面は船底形を呈し、埋土は褐色土の単層である。出土遺物は皆無で詳細な時期は不明だが、埋土の特徴が SD08 と同様に見られることから弥生時代終末期以前の所産と考えられる。

SD10 (第2・4図)

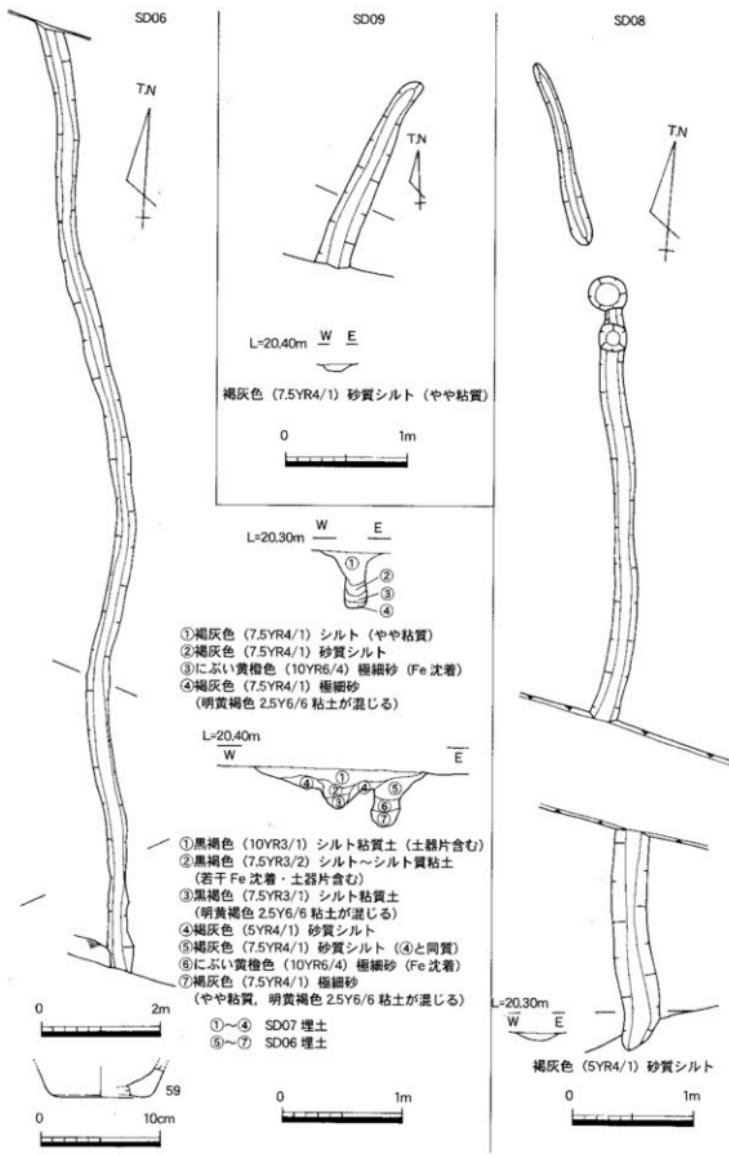
南調査区において確認した溝状遺構である。標高 20.21 m前後で検出し、検出長は約 0.32 m、検出幅は 0.35 m前後、深度は 0.15 m前後である。SD07 に接して途切れ、南部が調査範囲外となるため詳細は不明である。遺構断面は船底形を呈し、埋土は褐色土の単層である。SD07 と並存した可能性もあるが、調査地南壁の堆積状況では SD07 より先に埋没している。出土遺物は皆無で詳細な時期は不明だが、埋土の特徴等 SD08・09 と同様相を示し弥生時代終末期以前の所産と考えられる。

SD04 (第16図)

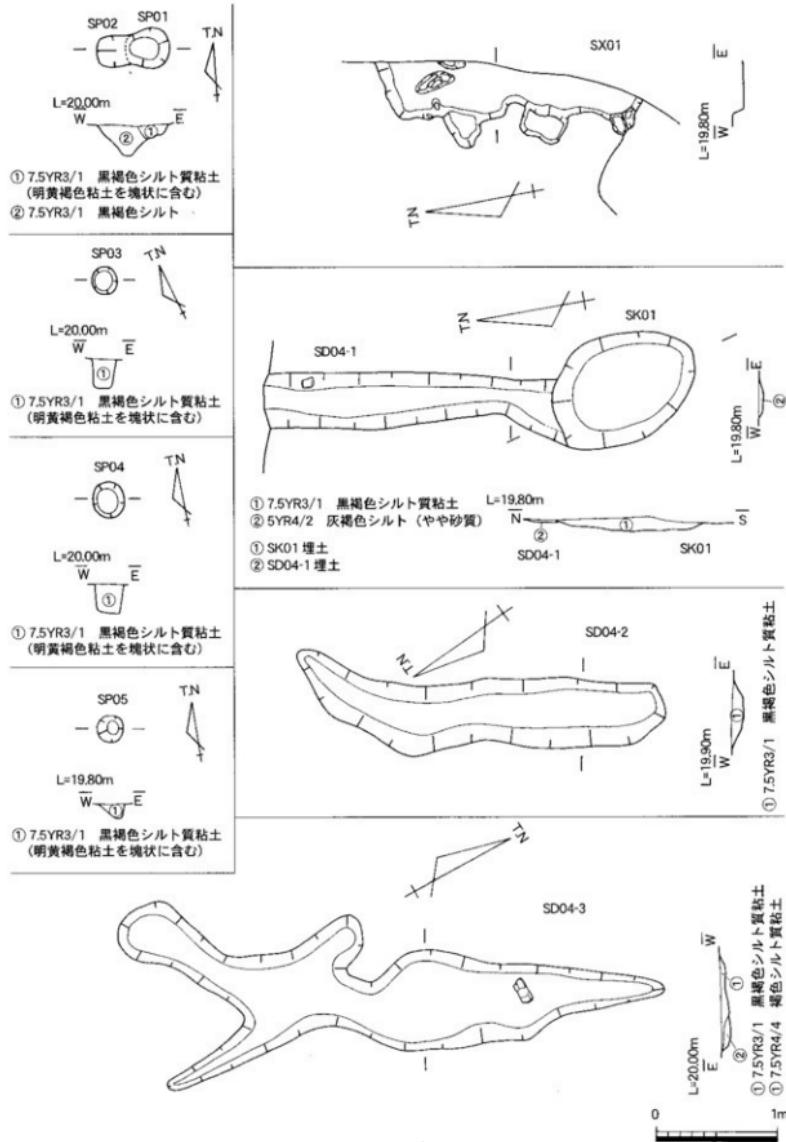
北調査区において確認した溝状遺構である。本来、第15層 (第3図参照) 上面で確認されるべき北東方向の溝であったが、平面での検出が容易でなかったことから第16層上面において検出した。その結果、溝状の落ち込みが断続して 3 条確認されたことから、SD04-1 ~ 3 として遺構番号を付け調査を行った。平面上では標高 19.64 ~ 19.84 mで検出し、検出長は各々 2.5 ~ 4.5 m前後で、検出幅は 0.5 ~ 0.8 m前後を測る。北東方向を向くが SD04-1 ~ 2 の間でやや屈曲するものとみられ、SD04-1 は北方向となる。遺構断面は船底形を呈し、埋土は黒褐～褐色粘質土である。第14・15層も含めて出土遺物は皆無であり、SD01 等の関係から古代以前で弥生時代終末期を中心とした所産と考えられるのみである。

SK01 (第16図)

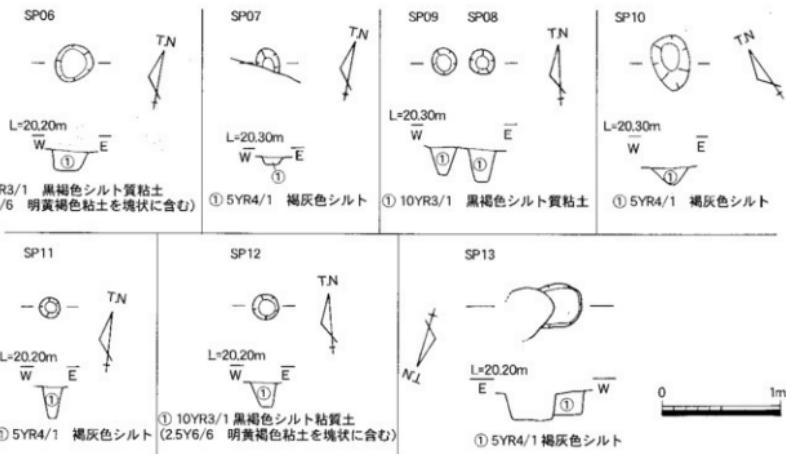
北調査区において確認した土坑である。標高 19.71 m前後で検出し、検出長は約 1.26 m、検出幅は約 0.9 mを測る楕円形である。深度は 0.12 m前後で、遺構断面は船底形を呈し、黒褐色粘質土で充填されている。出土遺物は皆無であり、SD04 との明瞭な前後関係が認められないことから、同様に古代以前で弥生時代終末期を中心とした所産と考えられる。



第15図 SD06・SD08・09平・断面図 (縮尺 1/40, SD06 平面図 1/80),
SD06 出土遺物 (縮尺 1/4)



第16図 SD04-1~3・SK01・SX01・SP01~05平・断面図 (縮尺 1/40)



第17図 S P 0 6 ~ 1 3 平・断面図 (縮尺 1/40)

S X 0 1 (第16図)

北調査区において確認した性格不明遺構である。標高 19.63 ~ 19.67 m 前後で検出し、検出長は約 2.10 m、検出幅は約 0.7 m を測り不整形を呈する。深度は 0.13 m 前後で、埋土は褐色粘質土となっている。当地点では第16層(第3図参照)が露呈しており、この粘土層に凹凸状の窪みが密集したものを見出した。足跡あるいは粘土採取痕と想定されるが、大半が調査範囲外に広がるものとみられ、詳細は不明である。また出土遺物も皆無であるため、層序関係から古代以前の所産と考えられるのみである。

S P 0 1 ~ 0 5 (第16図)

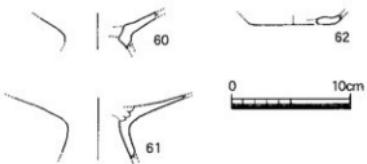
北調査区において確認したピットである。全て第16層(第3図参照)上面で平面検出をしたが、各埋土は第14層と類似した黒褐色粘質土であり本来15層上面から掘られた可能性がある。出土遺物は皆無であり時期不明だが、周辺部の状況からは弥生時代終末期を中心とした所産と考えられる。

S P 0 6 ~ 1 3 (第17図)

南調査区において確認したピットである。全て北調査区での第15層に相当する第2層(第4図参照)上面で検出された。埋土には黒褐色粘質土のもの(SP06・08・09・12)と褐色シルトのもの(SP07・10・11・13)がみられ、2時期に亘って形成された可能性も考えられる。出土遺物は皆無であり時期不明だが、南調査区における構造の状況からは、黒褐色土のものが弥生時代終末期、古相を示す褐色土のものがこれ以前と考えられる。

試掘調査出土遺物 (第18図)

60・61は高杯である。いずれも胎土に赤色粒を含んだもので、円盤充填法をもつものである。出土位置からSD07のものと見て差し支えない。62は須恵器杯で、出土位置からSD01の埋土上層からの出土と考えられる。



第18図 試掘調査出土遺物 (縮尺 1/4)

第4章 まとめ

当調査では複数の溝や掘立柱建物跡1棟の他、ピット及び溝状遺構といった生活痕が希薄ながら認められた。遺物についても全体的には希薄であったが、北東・南西端部にそれぞれ位置する大溝SD01・07で、弥生時代終末期を中心とした一定量の出土が認められる。いずれも調査対象となった範囲が狭くその全容が明らかになるものではないが、SD07については遺構の形態や廃棄された遺物の出土量から、溝が巡る内側の空間には何らかの施設が想定できる。出土遺物の内容からもその性格を明確にすることは困難だが、特筆するものに赤色顔料が口縁部の外側面に付着した吉備系の壺（第12図31）が挙げられる。赤色顔料については蛍光X線分析でピークが鉄において認められ（第1表参照）、ベンガラを用いて加飾していた可能性が指摘できる。吉備系土器については高松平野での出土例が稀であるが、近隣に位置する一角遺跡にも2点の出土例があり、やや内陸側となる当地でも吉備周辺との交流が示唆される。以上のように、当調査地点では南西部を中心に弥生時代終末期の遺構・遺物を認めることが可能、近接した調査地点である都市計画道路及び済生会地点へと広がる集落の一端を示す。周辺の調査地点で確認される他の時期のものについては皆無に等しい状況であることから、各期の集落とは離れた位置関係にあると考えられる。この点、当地を含めた周辺部における集落の詳細な変遷については、高松市教育委員会2005「日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム）」に掲載しており、そちらを参照されたい。

【参考文献】

人鷹和則 2001「高松平野における庄内併行期の土器様相」、信里芳紀 2001「四国地域における吉備系土器の分布」『庄内式土器研究 XXV』庄内式土器研究会、岡山県教育委員会 1974『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ 上原遺跡』、真鍋昌宏 2000「唐鏡城跡」『弥生式土器の様式と編年』木耳社。

測定時間 : 100sec

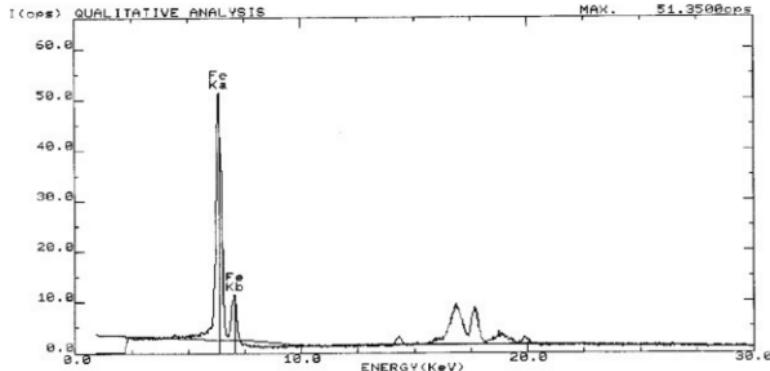
X線管電圧 : 50kV

X線管電流 : 0.10mA

ターゲット : Mo

最大 : 51.3500cps 数え落とし率 : 15.25%

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度cps
1	Fe - K α	6.368	369.6922
2	Fe - K β	7.046	67.4051



第2表 日暮・松林遺跡出土土器 赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果

第3表 日暮・松林遺跡遺構観察表

遺構番号	株さま (m)	統計長 (m)	堆出幅 (m)	深さ (m)	方位	平面形状	断面形状	重複關係	埋土特徴	出土遺物	備考	
SP01	19.77	0.37	0.34	0.11	-	円形	円形	SP02を切る	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP02	19.77	0.25	0.25	0.25	-	円形	円形	SP01に係わる	黒褐色(7SYR0-1)リルト質	無		
SP03	19.84	0.24	0.21	0.25	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP04	19.84	0.30	0.24	0.28	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP05	19.85	0.25	0.21	0.10	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無	壁面(近傍)レンヂ下で露出	
SP06	20.06	0.32	0.30	0.18	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP07	20.13	0.19	(0.16)	0.06	-	円形?	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)シルト	無		
SP08	20.19	0.23	0.21	0.28	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP09	20.11	0.23	0.21	0.23	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP10	20.06	0.45	0.31	0.18	-	楕円形	複雑状	-	褐灰色(7YRH-1)シルト	無		
SP11	20.05	0.17	0.16	0.27	-	円形	扇形	-	褐灰色(7YRH-1)シルト	無		
SP12	20.07	0.21	0.20	0.26	-	円形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、稍黃褐色粘土を複数に含む	無		
SP13	20.10	0.32	(0.25)	0.20	-	楕円形?	扇形	SB01 P-3に切られる	褐灰色(7YRH-1)シルト	無		
SB01	20.09 ~20.17	3.9	前後	2.7m前後	-	N-73°-E	-	-	-	無		
SB02	P-1	20.08	0.49	0.35	0.28	N-4°-W 前後	圓丸方形	扇形	-	黒褐色(7SYR0-1)リルト質粘土(赤褐色 粘土を複数に含む) 自然上層部、褐黄色(7SYR4-1)リルト質 土の生地が中心) 下層部、黒褐色(7SYR1-1)粘 土	無	
SB03	P-2	20.08	0.38	0.36	0.31	N-47°-E 前後	圓丸方形	扇形	-	同上	無	複合(近傍)レンヂ下で露出
SB04	P-3	20.09	0.50	0.38	0.36	N-2°-E 前後	圓丸方形	扇形	SP13に切る	同上	柱面上部部 壁土層被片	複合(近傍)で露出
SB05	P-4	20.16	0.50	0.40	0.27	N-11°-E 前後	圓丸方形	扇形	-	同上	柱面上部部 壁土層被片	柱面上部部 壁土層被片
SB06	P-5	20.17	0.49	0.34	0.38	N-11°-E 前後	圓丸方形	扇形	-	同上	無	
SB07	P-6	20.17	0.57	0.37	0.41	N-47°-E 前後	圓丸方形	扇形	-	同上	無	複合(近傍)に複数 ある
SK01	19.71	1.2	0.50	0.12	N-21°-W前後	楕円形	船底形	-	黒褐色(7SYR0-1)シルト質粘土	無		
SK02	19.49	4.00	2.00	1.63	(N-37°-W前後)	-	段付	-	上部部 黒褐色(7SYR1-1)粘土(稍黃褐色 土を複数に含む)、灰褐色(7SYR1-1)粘 土(灰褐色土を複数に含む) 下部部、褐黄色(7SYR4-1) リルトや砂質土	無	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK03	19.37 ~(19.53)	5.30	0.67	0.36	北西 (N-26°-W前後)	中や蛇行	V字形	-	上部部 黑褐色(7SYR0-1)リルト質 土(灰褐色土を複数に含む) 下部部、褐黄色(7SYR4-1) リルトや砂質土	無	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK04	19.50 ~(19.61)	10.00	0.67	0.12	(N-26°-W前後)	圓錐的	船底形	-	上部部 黑褐色(7SYR0-1)シルト質粘土、下 部部、黑褐色(7SYR0-1)シルト質粘土(稍黃 褐色粘土を複数に含む) 中部部、褐 色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)、灰 褐色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)、灰 褐色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)	無	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK05	19.64 ~(19.71)	2.45	0.47	0.08	北 やや蛇行	船底形	-	-	褐褐色(7SYR4-1)シルト質粘土(Fe沈澱)	無		
SK06	19.70 ~(19.84)	2.65	0.66	0.10	北東 やや蛇行	船底形	-	-	褐褐色(7SYR0-1)シルト質粘土	無		
SK07	19.65 ~(19.84)	4.35	0.53	0.08	北東 やや蛇行	船底形	-	-	上部部 黑褐色(7SYR0-1)リルト質粘土、下 部部、褐褐色(7SYR4-1)リルト質粘土	無		
SK08	19.84 ~(20.18)	1.29	0.28	(N-70°-W前後)	中や蛇行 船底形?	船底形 +リ字形?	-	-	上部部、褐褐色(7SYR0-1)リルト質粘土 上部部、河岸石合意) 下部部、褐褐色(7SYR4-1) リルト質粘土(植物茎葉付着) 中部部、褐 色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)、灰 褐色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)	SD07に切られる	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK09	20.00 ~(20.19)	18.50	0.38	0.50	北 (N-17°-W前後)	中や蛇行	U字形	SD07に切られる	上部部 黑褐色(7SYR0-1)シルト 上部部、河岸石合意) 下部部、褐褐色(7SYR4-1) リルト質粘土(植物茎葉付着) 中部部、褐 色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)、灰 褐色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)	無	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK10	20.16 ~(20.23)	11.70	1.35	0.32	南東	溝曲	段付	SD08に切る	上部部、褐褐色(7SYR0-1)シルト 上部部、河岸石合意) 下部部、褐褐色(7SYR4-1) リルト質粘土(植物茎葉付着) 中部部、褐 色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)、灰 褐色(7SYR4-1)リルト質粘土(植物茎葉付着)	SD07に切られる	柱面上部部 壁土層被片 底みがり	
SK11	20.13 ~(20.17)	8.10	0.33	0.06	北 (N-12°-W前後)	中や蛇行	船底形	-	褐褐色(7YRH-1)船底質シルト	無	SD07に切れる	
SK12	20.23	1.68	0.27	0.16	北東(4°-E)	-	船底形	-	褐褐色(7YRH-1)船底質シルト(やや粘質)	無	SD07に切れる	
SK13	20.21	0.82	0.25	0.15	-	-	船底形	-	褐褐色(7YRH-1)船底質シルト	無	SD07に切れる	
SK14	19.63 ~(19.87)	2.19	0.70	0.13	-	不整形	凸凹状	-	褐褐色(7YRH-1)シルト質粘土(稍黃褐色粘 土が混入)	無		

第4表 日暮・松林遺跡遺物観察表

()の数値は残存率を示す

枚文 番号	出土箇所名	種別	器種名	性質		形状	胎土	色調	調整	備考
				口径	腹深					
1	S001 下層	陶生土器	壺口縁鉢	(1.6)		普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-2	外壁 3.2寸	
2	S001 下層	陶生土器	便	14.3	(2.6)	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-2	外壁 3.2寸	
3	S001 下層	陶生土器	壺	18.6	(8.2)	普通	石英・長石含む	内面: 白灰/VR7-1 外壁: 黄褐色/VR5-2	内面 ハタケ 外壁 ハタケ	
4	S001 上層	陶生土器	壺坏	(2.66)		普通	角閃石含む	内面: 黄褐色/VR5-2 外壁: 黄褐色/VR5-2		
5	S001 上層	陶生土器	壺坏	(3.7)		普通	石英・長石含む	反対側 10.1寸		
6	S001 下層	陶生土器	壺坏	(2.7)		普通	角閃石多・含む	黄褐色/VR5-2		
7	S001 下層	陶生土器	壺鉢	(2.2)	5.3	普通	石英・長石含む	内面: 茶褐色/VR5-2 外壁: にごい黄褐色/VR7-2	内面 ハタケ 外壁 略斑押さえ	
8	S001 下層	陶生土器	壺鉢	(3.6)	7.0	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR7-2	外壁 ハタケ 外壁 ハタケ	
9	S001 屋	石器	研石	長さ7.7、幅3.5、厚さ2.2cm		石材、砂岩				
10	S005	陶生土器	灰陶			普通	角閃石含む	圓筒形/VR5-4		外壁黒泥に墨書き
11	S009	陶生土器	便	17.6	(1.3)	普通	角閃石含む	にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケ	
12	S009	陶生土器	壺			普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-1 外壁: にごい黄褐色/VR5-1	内面 ハタケ 外壁 ハタケ	
13	S009	陶生土器	壺鉢	(1.6)	4.2	普通	角閃石含む	内面 オリーブ色/VR5-4		
14	S009	陶生土器	壺鉢	(2.7)	6.6	普通	角閃石含む	にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケ 外壁 ハタケ	
15	S005	陶生土器	壺鉢	(1.5)	8.8	普通	金剛石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-1 外壁: にごい黄褐色/VR5-1	内面 ハタケ	
16	S005	石器	石刀	長さ4.4、幅3.8、厚さ0.7、重さ23.9g		石材、サスカイト				
17	S007	陶生土器	便	16.0	(1.2)	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-5		
18	S007	陶生土器	便に附部	27.0	(1.5)	普通	石英・長石含む	普通/VR5-2		
19	S007	陶生土器	便	(4.2)		普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR7-4	口部に板状突起	
20	S007	陶生土器	便	18.6	(1.0)	普通	角閃石含む	内面: 黄褐色/VR5-2 外壁: 黄褐色/VR5-2		
21	S007	陶生土器	便	16.0	(1.0)	普通	石英・長石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-4 外壁: にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケ	
22	S007	陶生土器	壺	13.2	(2.8)	普通	赤色粒含む	内面: にごい黄褐色/VR5-4 外壁: 黄褐色/VR5-5		
23	S007	陶生土器	便	14.2	(1.0)	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-5		
24	S007	陶生土器	便	16.0	(0.8)	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-4		
25	S007	陶生土器	壺	16.9	(2.0)	普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-2 外壁: 黄褐色/VR5-3	内面 ハタケ	
26	S007	陶生土器	便	15.8	(0.6)	普通	赤色粒含む	内面: にごい黄褐色/VR5-3 外壁: にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケ/板状、隙縫見え	
27	S007	陶生土器	便	15.1	(0.2)	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-5		
28	S007	陶生土器	便	15.0	(0.4)	普通	角閃石含む	網状模様/VR5-5		
29	S007	陶生土器	便	15.8	(3.3)	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-4	外壁 3.0寸	
30	S007	陶生土器	便	17.4	(4.0)	普通	赤色粒含む	にごい黄褐色/VR5-4		
31	S007	陶生土器	便	15.4	(7.4)	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-4	吉備系、下田式、 口部内側に朱が残る。	
32	S007	陶生土器	便鉢	(5.0)	4.8	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-4	吉備系、下田式	
33	S007	陶生土器	便	18.6	(2.0)	普通	石英・長石含む	にごい黄褐色/VR5-4		
34	S007	陶生土器	便鉢	21.2	(4.0)	普通	石英・長石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-4 外壁: にごい黄褐色/VR5-6		
35	S007	陶生土器	便鉢	21.3	(6.0)	普通	角閃石少・粒含む	にごい黄褐色/VR5-6		
36	S007	陶生土器	便	22.1	(5.0)	普通	角閃石含む	網状模様/VR5-6		
37	S007	陶生土器	便鉢	24.6	(5.0)	普通	角閃石含む	網状模様/VR5-6		
38	S007	陶生土器	便	25.0	(4.0)	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-6		
39	S007	陶生土器	便	26.2	(3.1)	普通	角閃石含む	にごい黄褐色/VR5-4		
40	S007	陶生土器	便	(3.7)		普通	角閃石含む	内面: 黄褐色/VR5-4 外壁: にごい黄褐色/VR5-5		
41	S007	陶生土器	高円形容器	(2.0)	7.0	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-6	内面 ハタケ	
42	S007	陶生土器	高円形容器	(2.4)	7.0	普通	全盤石英含む	網状模様/VR5-6		
43	S007	陶生土器	高円形容器	(2.55)	7.6	普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-6		
44	S007	陶生土器	高円形容器	(3.2)		普通	頗る	網状模様/VR5-6		
45	S007	陶生土器	高円形容器	(4.0)		普通	頗る	網状模様/VR5-6		
46	S007	陶生土器	高円形容器	(4.0)		普通	頗る	網状模様/VR5-6		
47	S007	陶生土器	高円形容器	(4.0)		普通	頗る	内面: 黄褐色/VR5-6 外壁: にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケ	
48	S007	陶生土器	高円形容器	(3.25)		普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-6 外壁: にごい黄褐色/VR5-4		
49	S007	陶生土器	便	(2.0)		普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-6		
50	S007	陶生土器	便	(3.0)		普通	石英・長石含む	網状模様/VR5-6		
51	S007	陶生土器	小型立脚土器	(4.1)	9.8	普通	角閃石少・粒含む	網状模様/VR5-6	内面 ハタケ	
52	S007	陶生土器	小型立脚土器	(4.4)		普通	角閃石含む	内面: 黄褐色		
53	S007	陶生土器	便鉢	(2.0)	5.6	普通	角閃石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-4 外壁: にごい黄褐色/VR5-4		
54	S007	陶生土器	便鉢	(2.4)	5.7	普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-6 外壁: にごい黄褐色/VR5-3	内面 ハタケ	
55	S007	陶生土器	便鉢	(3.1)	5.6	普通	石英・長石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-7		
56	S007	陶生土器	便	(3.0)	7.2	普通	石英・長石含む	内面: にごい黄褐色/VR5-6 外壁: にごい黄褐色/VR5-4	内面 ハタケの痕跡	
57	S007	陶生土器	便鉢	(2.0)	8.7	普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-6 外壁: 黄褐色/VR5-1		
58	S007	可燃	粘土片瓦	横幅1.9cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm		石材、粘土片瓦				
59	S006	陶生土器	便	(2.5)	8.3	普通	石英・長石含む	内面: 黄褐色/VR5-2 外壁: にごい黄褐色/VR5-3		
60	5Tr	陶生土器	便鉢	(2.4)		普通	赤色粒含む	網状模様/VR5-0		
61	5Tr	陶生土器	便	(5.4)		普通	赤色粒含む	網状模様/VR5-0		
62	17r	陶生土器	便鉢	(0.6)	7.2	普通	颗粒はほとんど見ない	網状模様/VR5-0		

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひぐらし・まつばやしいせき						
書名	日暮・松林遺跡						
副書名	フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	第1冊						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第87集						
編著者名	川畠聰, 小川賢, 片桐節子						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2636						
発行年月日	西暦 2005年8月31日						
ふりがな 所収遺跡名	しょくいち 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひぐらしまつばやしいせき 日暮・松林遺跡	香川県 高松市 多肥上町	37201	34° 17' 74"	134° 03' 49"	2004.12.1 ~ 2005.1.7	750 m ²	フィット ネスクラ ブ建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
日暮・松林遺跡	集落	弥生時代終 末期	掘立柱建物 跡, 溝	弥生土器, 石器		赤色顔料の付着 した吉備系土器	

日暮・松林遺跡

— フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成17年8月31日

編集 高松市教育委員会
 高松市番町一丁目8番15号
 発行 高松市教育委員会
 株式会社象企画
 印刷 有限会社 中央ファイリング



北調査区全景（北東方向から）



南調査区全景（南西方向から）



SD01～03 遺構検出状況（南東方向から）



SD01～03 完掘状況（南東方向から）



SD01～03 完掘状況（北方向から）



北調査区 北東部土層堆積状況



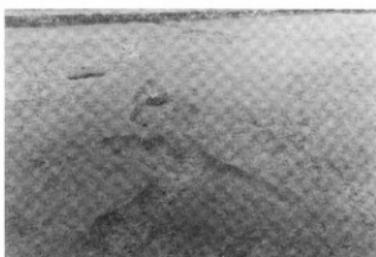
SD04-1・SK-01 完掘状況（南方向から）



北調査区 北壁土層堆積状況（SD04-1付近）



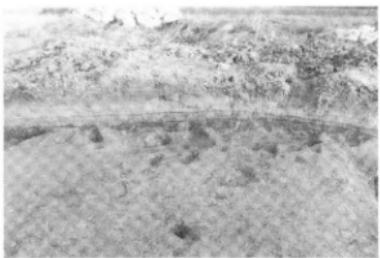
SD04-2（南方向から）



SD04-3（南方向から）



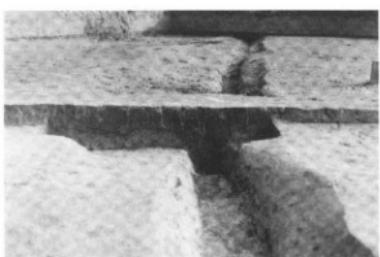
SD04 他 北調査区西半部（南方向から）



SX01 (西方向から)



SD05 検出状況（南方向から）



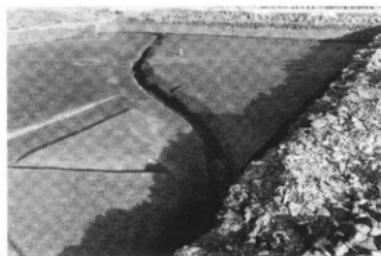
SD05 断面



SD05 遺物出土状況（南方向から）



SD05 遺物出土状況（東方向から）



SD05 完掘状況（南方向から）



SD05 完掘状況（東方向から）



SD07 検出状況（南方向から）



SD07 遺物出土状況（南端部）



SD07 遺物出土状況（東方向から）



SD07 遺物出土状況（西方向から）



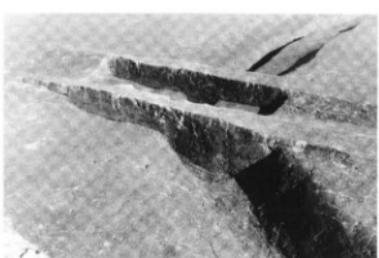
SD07 完掘状況（南方向から）



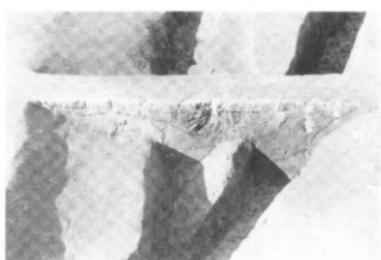
SD07 完掘状況（西方向から）



南調査区南壁土層堆積状況（SD06-07-10付近）



SD07 断面（西端部）



SD06・SD07 剖面



SD06 完掘状況（南方向から）



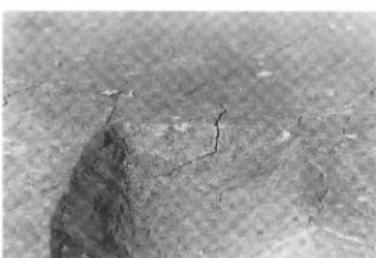
SD08（南方向から）



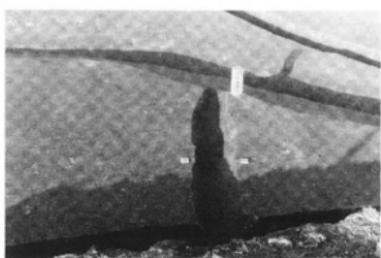
SD06 剖面



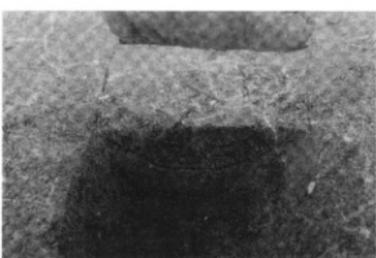
SD06 完掘状況（北方向から）



SD08 剖面



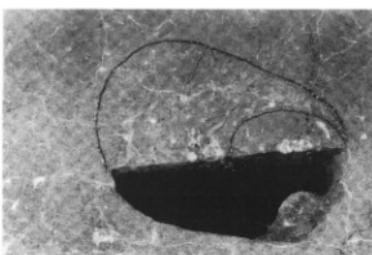
SD09（南方向から）



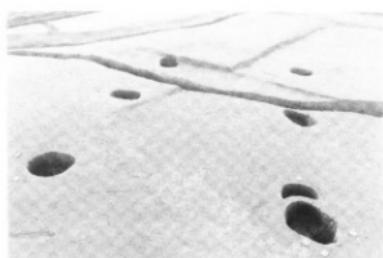
SD09 剖面



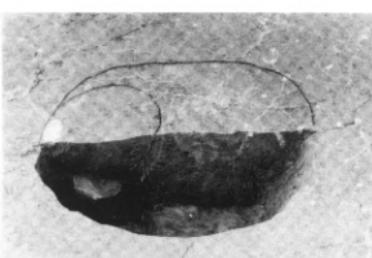
SB01 検出状況 (東方向から)



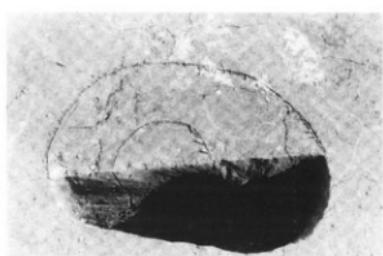
SB01 P-3



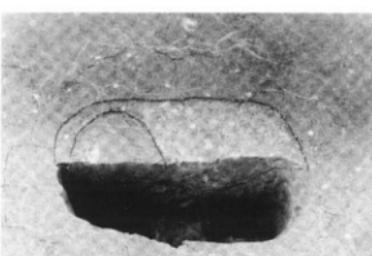
SB01 完掘状況 (東方向から)



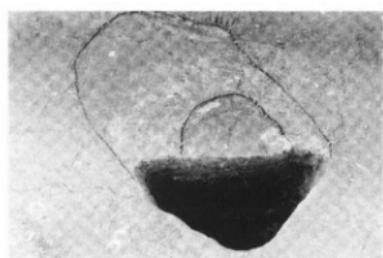
SB01 P-4



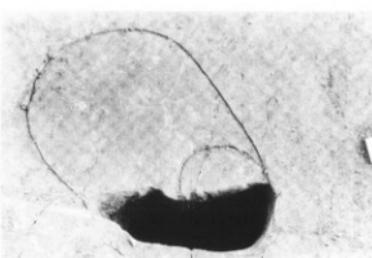
SB01 P-1



SB01 P-5



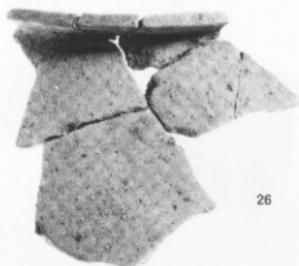
SB01 P-2



SB01 P-6



31



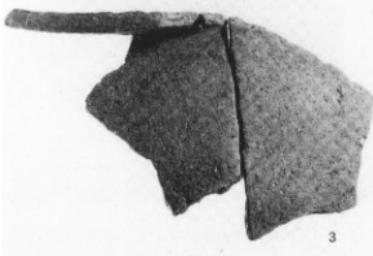
26



32



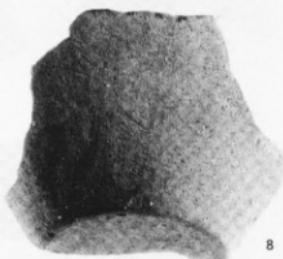
10



3



51



8



9



19

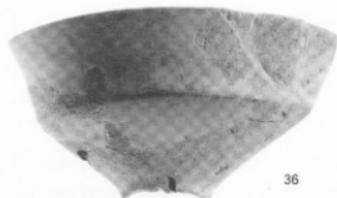
出土遺物



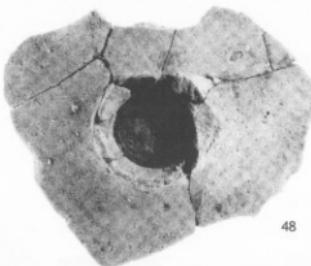
38



35



36



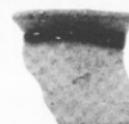
48



30



22



27

52



40



34



37



46



45



44



47

出土遺物